# 4. モラエスの趣味を通じた友人倉本清一と彼が残したモラエス忌の寄せ書きについて

佐藤 征弥

## １．はじめに

令和 4 (2022) 年の初頭、モラエス研究において興味深い資料が見つかった。昭和 27 (1952) 年から昭和 30 (1955) 年にかけての 4 年間のモラエス忌の参加者による寄せ書きである (図 1)。寄せ書きを持っていたのは、徳島市の実業家故倉本清一であり、彼が色紙に絵を描き、法要の参加者に名前やメッセージを記してもらった後、軸装して家に保管していた。清一は昭和 30 (1955) 年、モラエス忌をひかえ色紙を準備した後、5 月 29 日に急死した。色紙は彼の遺志を汲んで法要に出され、寄せ書きをした後で遺族のもとに返された。これら 4 枚の寄せ書きは、倉本家にしまわれたままであったが、清一の長男である繁氏が令和 3 (2021) 年 10 月に亡くなり、遺族が遺品を整理したところ倉庫から発見され、妻のキミ子氏が徳島日本ポルトガル協会に寄贈し、世人に知られることになった。

昭和 30 (1955) 年に発行された『モラエス案内』には、清一の死を悼む次のような文章が載っている[1]。

> 生前のモ翁と音楽、絵画、演劇などの趣味を通じて親しく交際していた倉本清一氏 (五七才) は、百年祭にモラエスの劇「浮かれモラエス」の主人公モラエスにふんして上演する予定で、準備を進めておられたが、さる五月二十九日心臓マヒのため急逝された。百年祭を前に、モ翁の肖像をかきあげ、翁をしのぶ放送座談会中に倒れられたもので、絶筆となった。肖像画は百年祭を記念展覧会に出品されることになっていますが、ここにつつしんで哀悼の意を捧げます。

「モ翁の肖像」とあるのは、色紙に描いた肖像画であることが今回の発見で判明した。また、生前に「趣味を通じて親しく交際していた」という貴重な人物であったが、清一が新聞等のメディアでモラエスについて語ったり記したりした資料が、このラジオ放送を含めて伝わってこなかったためか、モラエス研究において彼が注目されることはこれまでなかった。今回の寄せ書きの発見が契機となり、遺族の方にインタビューを行い、清一がどのような人物であり、モラエスとどのような交流があったのか話を伺ったので以下に報告する。

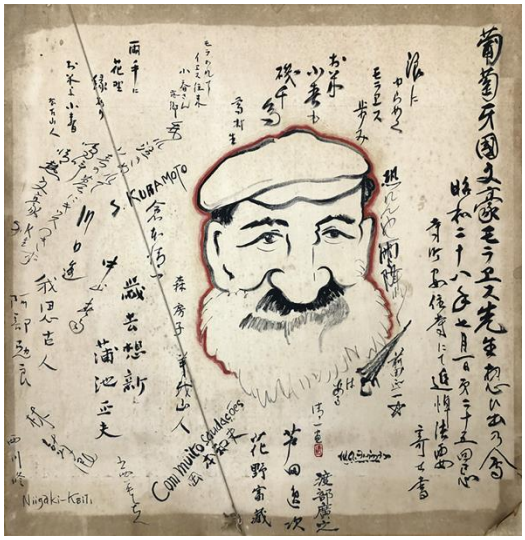
また、4 枚の寄せ書きに書かれた参加者の名前やメッセージを読み解いて、モラエス顕彰の歴史の一端を明らかにすることを試みた。

---

[1] 徳島県立図書館編集発行『モラエス案内』.39 頁.（1955）.

昭和 27（1952）年

昭和 28（1953）年



昭和 29（1954）年

昭和 30（1955）年

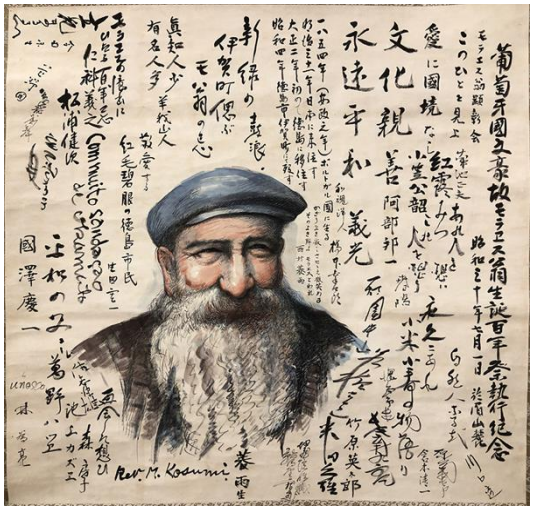


**図1　発見された 4 枚の寄せ書き**

## ２．倉本清一について

倉本清一は妻トヨノと間に二男三女をもうけた。現在名古屋市に在住する次女の恭子氏と徳島県佐那河内村に在住する次男の大治氏が存命である。令和 4（2022）年 12 月 3 日に大治氏の自宅を訪問し、話をうかがった。以下の内容は、その時のお話と見せていただいた資料に基づく。

清一は、西船場 1 丁目の新町橋近くで船具商を営む蔵本吉蔵と妻スエの長男として生まれた。戸籍の名前は蔵本清一であるが、清一の叔父（吉蔵の弟）も近くで船具商を営んで

いたため、混同されないように商売では「倉本」を名乗った。清一も公の場では「倉本」で通しており、本稿でも「倉本」姓を用いることにした。

清一は家業の船具商を引き継ぐかたわら、持ち前の好奇心と行動力で若い時から様々な事業に手をのばした。昭和 11（1936）年の初頭に映画館「松竹座」を設立した際、開館直前の昭和 10（1935）年 12 月 30 日の徳島日日新報に新進気鋭の実業家として清一を詳しく紹介した記事がある（図 2）。記事には、大正 10（1921）年に徳島で最初のデパートを設立したこと、同じ頃にダンスホールを設立したこと、乗馬クラブを創設したことなどが記されており、さらに「劇の研究、長唄、洋畫等に手を染め、特に漫畫はその得意とする所の一つで曾て個人展を開催し同好者を驚かした。」と人となりが記されている。多芸多才な人物であり、いわゆる粋人であったのだろう。寄せ書きに描かれた絵は手慣れたタッチであり、後述するように文字によるメッセージも頓知がきいていて、漫画を得意としたというその才が表れている。大治氏の家には清一が手作りで製作した扁額が架けられていたが、よくこういった物を作っていたとのことであった。また、軸装した寄せ書きについても家に飾られていた記憶があるとのことであった。清一はこうした芸を趣味として楽しんでいたようで、それを仕事とすることはなかったが、清一の弟の幸一は本職の画家であった。

新町天神下を
今日の繁榮に導いた
デパートの誕生から
徳劇松竹の出現迄
松竹座の建築と
事業界の尖端兒
倉本清一氏
多趣味と
奮闘家
御好意を多謝す

図2 倉本清一を紹介する新聞記事

清一とモラエスとの交友については、大治氏が生まれた時にはすでにモラエスが亡くなっていたので自身はモラエスと会ったことはないが、清一が断片的にモラエスのことを語っていたことを覚えておられた。清一がモラエスと知り合うようになったのは、清一が 20 代後半の頃で、モラエスは 70 才を超えていた。モラエスは、ポルトガルの家族や友人や出版社と頻繁に手紙をやりとりしていたが、郵便局に通う道すがら、清一の店の前を通るので、通りすがりに話をするようになったらしい。日本語で支障なく会話でき、清一がモラエスにでんちゅうなどの衣類や食事を渡したりしたこともあったという。

前述のように『モラエス案内』には昭和 30（1955）年のモラエス生誕百年祭において、清一が創作した「浮かれモラエス」の劇を上演する予定であったことが記されているが、当時 11 才の大治氏もモラエスを囃す子ども役で出演する予定であった。なお、この劇はすでに上演したことがあり、その時には大治氏も出演したということであった。

### ３．各年の寄せ書きの特徴

以下、各年の寄せ書きについて簡単に説明していく。表 1 に参加者とそれぞれのメッセージも載せた。

昭和 27（1952）年

寄せ書きのタイトルは次の通りである。

日本獨立第一年
葡萄牙國文豪モラエス先生をし乃ぶ会
昭和二十七年七月一日第二十四回忌
寺町安住寺にて追悼法要
寄せ書

「日本独立第一年」とあるのは、サンフランシスコ平和条約が昭和 27（1952）年 4 月 28 日発効し、連合国による占領が終わり、日本が主権を回復したことを祝している。

イラストはモラエスの姿が描かれているが、モラエスの家の前で撮影された写真を基にして描いたと推測できる。モラエスの右にさらに 2 枚のイラストがあり、ポルトガル国旗とモラエスが端唄「四季の唄」の歌詞を写した紙が描かれている。ともにモラエスの死後に部屋で見つかったものである。

清一はさらに、寄せ書きの右上に相合傘にも墓にも見えるイラストを描いた（図 3）。このイラストは、「安」「十」「字」「よね」「小春」を組み合わせていて、安住寺（十字）の墓におヨネと小春が埋葬されていることを表す判じ物になっている。イラストの周囲には「モラエス忌に寄せて」「我れ安住乃地なり　安住寺　清一」「およね小春のふるさとや恋し　我れ側尓（に）眠らん」と記されている。

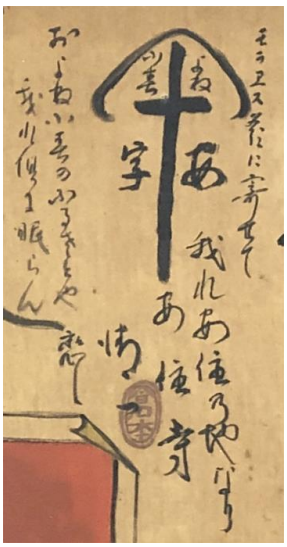


図3　安住寺の判じ物

昭和 28（1953）年

寄せ書きのタイトルは次の通りである。

葡萄牙國文豪モラエス先生想ひ出乃會
昭和二十八年七月一日第二十五回忌
寺町安住寺にて追悼法要
寄せ書

イラストはモラエスの顔が大きく描かれている。興味深いのは、図 4 で線で囲んで示したように、イラストの左上に清一が 5 箇所にわたって署名やメッセージを記

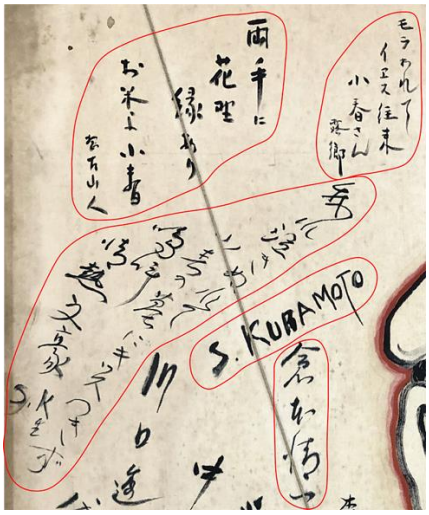



図4　倉本清一による様々な署名とメッセージ

していることである。名前や筆法を変えているが、筆跡から清一であると判断した。この年は参加者が少なく、左上部分が空白になっていたのだろうか、そこを埋めるために清一が書き込んだと思われる。同様に、前年の寄せ書きの左側にも富永の名前で記されたメッセージは筆跡から清一だと考えられる。

昭和 29（1954）年

寄せ書きのタイトルは次の通りである。

葡萄牙文豪故モラエス翁顕彰記念碑設立除幕式
二十六回忌追悼法要並ニ日本精神出版記念寄書
昭和二十九年七月一日　眉山麓

記念碑除幕式というのは、この年がモラエス生誕 100 年にあたり、それを記念して石碑が新町通の突き当たりの眉山の麓に設置され、その除幕式がモラエス忌の 7 月 1 日に挙行されたことを指している[2]。石碑は周辺の整備に伴って幾度か位置が多少変わり、現在は阿波踊り会館前に置かれている。除幕式には市長やモラエス翁顕彰会のメンバーの他、アルモンド・マルティンス駐日ポルトガル公使、モラエスを全国的に有名にした盛大な七回忌の実現に尽力した湯本二郎（当時学務部長）と天羽英二（当時外務省）が列席した。寄せ書きのイラストもこの石碑が描かれている。

また、モラエス生誕 100 年を記念して『日本精神』が復刻された[3]。 戦後になってモラエスの本が出版されるのは、これが初であった。

昭和 30（1955）年

寄せ書きのタイトルは次の通りである。

葡萄牙國文豪故モラエス翁生誕百年祭執行記念
昭和三十年七月一日　於眉山麓

一八五四年（安政元年）ポルトガル国に生る
明治三十一年日本に来住す
大正二年初めて徳島に移住す
昭和四年徳島市伊賀町にて歿す

[2] 佐藤征弥「モラエス翁記念碑について」.徳島大学総合科学部モラエス研究会編『「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集』第 3 号,26-31 頁(2017).

[3] 『日本精神』は花野富蔵の翻訳で第一書房より昭和 10（1935）に日本で最初に刊行されたモラエスの著作であり、それを昭和 29（1954）年に河出書房復刻した。

イラストは、昭和 28（1953）年と同様にモラエスの顔を大きく描かれているが、その時よりもずっと丁寧である。また、肖像の上にモラエスの略歴が記されており、他の 3 枚と比べて見た目が一段と立派な寄せ書きになっている。その理由には法要に合わせて開催された百年祭の実行にあたって清一が主要メンバーとして加わっており、その記念としたいという思いがあったと推測される。

しかし、百年祭と銘打たれているが、モラエスは 1854 年 5 月 30 日生まれなので、生誕百年は正しくは前年である。徳島県立文書館に保管されている百年祭関係の資料[4]を調べると、第一回の打ち合わせ会が昭和 29（1954）年 11 月 24 日にモラエス翁顕彰会の事務局がおかれている憲法記念館で開かれた。その開催案内の文章に「モラエス翁の生誕百年が明年五月三十日に該当します（下線は筆者による）」と書かれている。100 年目ではなく 101 年目を生誕百年としており奇異に感じられる。100 歳の誕生日を生誕百年と呼ぶことにしたのかもしれない。

この時の打ち合わせ会の参加者には、倉本清一をはじめ、森房子、前田正一、若槻克己、真鍋英二、岡本和夫、花野富蔵、阿部勉良といった寄せ書きに登場する人物も出席していた。

続いて昭和 30（1955）年 5 月 20 日に次の打ち合わせ会が開かれ、7 月 1 日から 3 日までの 3 日間にわたってモラエス生誕百年祭を開催することが決定した。生誕 100 年をうたっているのだから誕生日の 5 月 30 日に開催しそうなものだが、実際は命日の 7 月 1 日を百年祭の初日とすることになった。理由は定かでないが、徳島市をあげての盛大なイベントとなり、準備に時間がかかったのだろうか。ちなみに百年祭の行事は、法要の他にモラエス展の開催、モラエス銘菓の展示販売（モラエス羊羹とモラエス饅頭）、モラエス祭（商店街での売り出し、阿波踊り、打ち上げ花火）、そしてモラエス喜踊劇である。この劇は 7 月 1 日に新町公民館において倉本清一ほか新町有志で上演する予定であった。

この打ち合わせ会には、清一も出席し、他に寄せ書きの参加者として横山昭（春陽）、松本進、真鍋英二、林鼓浪、若槻克己、森房子が出席していた。清一はその 9 日後、ラジオ番組の収録中に発作を起こし、帰らぬ人となった。

大治氏にインタビューした際に清一の葬儀を報じた新聞記事を見せていただいたが、葬儀の写真にはこの年の寄せ書きが写っている。萬野ハツエ、森房子、生田宏一、長尾新九郎らが記入していることが判別できた。清一の葬儀の際に書いてもらったか、あるいはそれ以前に清一が頼んで書いてもらったかは分からないが、いずれにせよモラエスの法要の前である。

## ４．寄せ書きの参加者

表 1 に寄せ書きの参加者のリストを示す。モラエス忌法要に参列した者と寄せ書きを書

[4] 徳島県立文書館.文書館資料 K201000174-76

いた者がイコールでないことをことわっておく。前章の最後に述べたように昭和 30（1955）年は、法要の前に記入した者がいたし、他にも法要に参加したが寄せ書きには記入しなかった者もいたと推測される。例えば、法要が営まれる安住寺の住職浅川律圓は、毎年法要を執り仕切ったと考えられるが、昭和 29（1954）年のみ寄せ書きに名前がみられる。また、生前から親交があった藍谷長三は、モラエス翁顕彰会や百年祭実行の主要なメンバーであり、4 年間の法要に一度も出席しなかったとは考えにくいが、寄せ書きには見られない。

昭和 29（1954）年はモラエスの生誕 100 年であったこと、昭和 30（1955）年は、百年祭が挙行されたことにより、政治家や諸団体の代表者の参加者が増えているが、本章では、それ以前から参加していた人物について焦点を当てて取り上げる。

生前から親交のあった者として、倉本清一、花野富蔵、森房子、岩本朋三郎、立花まるゑ、前田正一、古角勝、鷲野宥恵、花野富蔵がいる。

モラエスの死後、彼の文名が上がると徳島の文芸関係者や教育関係者が集まるようになった。花野富蔵は、生前にモラエスからポルトガル語を習い、モラエスの著作を次々と翻訳して世に送り出した人物であるが、徳島では詩人集団「詩脈」メンバーとしても活動した。文芸関係者では他に詩人の広瀬志津雄、西村菱雨、歌人の小西英夫、村崎凡人、渡部廣之、散文作家の佃實夫、また、ジャーナリストとして東京で『新小説』の編集者をしていた濱野英二、徳島新聞記者の横山昭（春陽）、四国放送の松本進、画家の林鼓浪が寄せ書きに参加している。

詩人の西村菱雨は、花野富蔵の友人で、西村が興源寺で出家得度した時に、花野が興源寺でモラエスの翻訳作業していた関係で、モラエスのことを知った。昭和 21（1946）年にモラエス忌が復活した際、西村は自分の寺である観潮院の他に任されていた潮音寺でモラエス忌の法要を執り仕切ることを依頼された。彼はその時のことを回想して「花野富蔵氏、松本進氏、佃実夫君、岡哲氏、前田正一氏、門田氏、森女史それに今は亡き倉本氏その他十数氏があった。主催者側として佐々木氏ら二三の人も列席せられ、当日の世話に当られた。小西英夫氏も見えておられて、つつましく端座しておられた姿にはひどく衝たれ、いまも深く印象に残っている。」と記している[5]。彼の証言に登場する花野富蔵、松本進、佃実夫、前田正一、森房子、小西英夫、倉本清一は寄せ書きにも参加しており、長らく法要に参加し続けてきた面々であろう。

後に作家となった佃実夫は、寄せ書きが作成された時期は徳島県立図書館の司書を務めていて、昭和 30（1955）年に発刊された『モラエス案内』の編集を担当した。彼は昭和 29（1954）年の寄せ書きに「思想の科学研究会」と記しているが、この会は人々の思想を経験科学的に研究することを目的として鶴見俊輔らによって昭和 21（1946）年に発足し、佃は熱心な会員であった[6]。『モラエス案内』には鶴見俊輔や同会のメンバーであった久野収も寄稿しているが、佃が依頼したと思われる。佃自身は幼少時に一度だけモラエスに会ったことがあ

---

[5] 徳島県立図書館編集発行『モラエス案内』．28―129 頁．（1955）．

[6] 佃は後に同会の会長を務めた（1967―1969）．

り、後に『わがモラエス伝』を著し[7]、その時の印象も書き残している。

新垣宏一は、昭和 26（1951）年から徳島県教育研究所長を務めていたが、本報告書の荒武の論文[8]にあるように、台湾で育ち、台湾にいた時に熱心に作家活動を行なっていた。教育者となってからは、作家としての活動は抑えていたが、後に新開宏樹のペンネームで『モラエスの徳島散歩―モラエス文学の背景』を著した[9]。

四国放送の松本進も古くからモラエス忌に参加していた。後年、松本が中心となって編集した『徳島のモラエス』が刊行されたが[10]、その中には四国放送が制作したモラエスのドキュメンタリー番組の台本が掲載されている。

濱野英二は、鳴門出身で、泉鏡花の弟子となり、明治から昭和初期まで続いた文芸雑誌『新小説』の編集に携わった。徳島に戻ってからは文化人として幅広く活躍した。彼は、モラエスと直接交流はなかったが、昭和 27（1952）年に企画された「廿四回忌に因む座談会」[11]において次のように回想している。「僕もモラエスをはじめてマカオで知ったよ。そのあとで日本でモラエスが有名になったんで、へーえあのモラエスだなと思ったよ」。また、歌人である吉井勇を案内したことについて次のように語っている。「十何年か前に吉井勇さんが来県した時湯本さんと三人で見に行ったんですが、仏壇の戸をあけた途端にヘビがにょろにょろはい出したもんだから吉井さんがびっくりしてたじたじとなったことがありましたよ。」

また、郷土史を研究する「阿波郷土会」のメンバーもモラエス顕彰に努め、寄せ書きに参加している。すでに名前が挙がっていて重複する者が多いが、前田正一、横山昭（春陽）、林鼓浪、島村萬舞、飯田義資、若槻克己である。

### 5. モラエスの絵画趣味

第1章に記したように倉本清一とモラエスは「音楽、絵画、演劇などの趣味を通じて親しく交際していた」とされる。モラエスは、日本の音楽や演劇について著作の中で取り上げることはあっても、それを趣味としていたことは知られておらず、この文章はモラエスではなく、清一の趣味を記したものかもしれない。一方、絵画についてモラエスは、音楽や演劇以上に作品の中で触れることが多く、*また* O "Bon-odori„ em Tokushima（1916）[12]（邦題『徳島の盆踊り』）には自筆のイラストを何枚も挿絵に使っているなど絵の素養があった。

モラエスがよく絵を描いていたことは、七回忌に合わせて徳島日日新報が開催した「モラ

---

[7] 佃實夫『わがモラエス伝』. 河出書房新社.（1966）.

[8] 荒武達朗「"在台 2 世" 文学者新垣宏一の見た徳島のモラエス」.『令和 4 年度徳島大学総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書：異文化から照らし出された四国～地域における外国人受容の意義についての歴史的考察～』34-45 頁（2023）.

[9] 新開宏樹 『モラエスの徳島散歩―モラエス文学の背景』出版カラムス. 1975

[10] 徳島のモラエス編集委員会編『徳島のモラエス』徳島市中央公民館.（1972）.

[11] 徳島県立図書館編集発行『モラエス案内』（1955）より「廿四回忌に因む座談会」. 56-58 頁.

[12] W. de Moraes, O "Bon-odori„ em Tokushima (Caderno de impressões intimas). PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ.（1916）.

エスさんを懐かしむ座談会」[13]において次のような証言がある。

> 佐々木氏「モラエスさんが私の宅へ買物に来られた時には蜂の巣やタワシの絵を書いて注文があり、これ分りますかと聞かれましたが私達から見ると何の絵だかさっぱりわからん、いくら考へてもわからないので聞き返すと、蜂の巣だとかタワシの絵だとかいはれますが私がみたらどうしてもさうは見えませんでした」
> 森房子さん「雑誌社か新聞社の人かは知りませんが時時先生を訪ねて来られてモラエスさんがお書きになったものを買ひ五圓札か十圓札かを必ず置いて帰ったりしたことが度度ありました、それに先生はよく原稿を書いてどこかに送ってゐました」

佐々木は、モラエスが買い物に通っていた八百物商「輪違屋」の佐佐木新一である。このエピソードでは、何の絵かわからないと言っているので、絵が下手であるかのようだが、実際はあえて分かりにくそうな絵を見せて、相手が困るのを見て楽しんでいたのだろう。続けて森房子が、モラエスが「お書きになったもの」を業者が買っていったことを語っている。「お書きになったもの」が文章なのか絵なのかはっきりしないが、モラエスは日本語で会話することはできても、文章を書くことはほとんどできなかったし、ポルトガル語で書いたとしてもそれを日本の出版社が買っていたとは考えにくいので、文章ではなく絵であろう。しかし、絵だとしても、モラエスがどのような絵を描いて、それがどのように使われたかまったく情報がない。埋もれてしまっているのが残念である。

さらに、モラエスは錦絵、版画、引き札といったものを趣味として集めていた。昭和 30（1955）年 6 月 14 日に徳島県立図書館にて開かれた座談会「モラエスの人と生活」[14]において林鼓浪は次のように述べている。

> たとえば錦絵、版画を相当集めてある。広重、北齊、清長、初代豊国、二代豊国、こういうような人の、これは粗末なもので主に神戸の元町あたりで買ったものでないかと思う。その当時一枚が二十五戔位のもの。清長の初版であったら二十五円の時代なんです。明治の末年私は神戸におりましたから元町に売っておったのを知っている、外人向けの錦絵というので作った複製です。その複製をモラエスさんが大分買っておりました北齊の風景画、なかなか複製と申しましても今の複製と違いましてなかなか優秀なもので、一見しますと初版みたようなふうな感じがしております。そういうようなものを多く集めておる。その間で折本になっておるのが一つ、錦絵を表具屋さんに頼んで本に貼りつける、あるいは巻物にして御自分での糊で貼りつけて持っておったものだと思う。ところがおかしいいのは、私はさすがにどうも外人はやはり錦絵を

[13] 徳島日日新報　昭和 10 年 6 月 26 日掲載
[14] 徳島県立図書館編集発行『モラエス案内』（1955）より「モラエスの人と生活」. 86-104 頁.

鑑賞するといったところで、本当に木版の妙味とか、ああいう知識がまだそこまで研究がなされていないのかと思った点は、その木版画の一々糊で貼って巻物にしてあるそのしまいへ徳島の引札を多く貼りつけてある。

この引札というのは今のお方には一寸縁遠い言葉なんですけれども、これは宣伝用のもので、たとえば味噌屋、醤油屋などが売り出す場合に佐古何丁目ということを書いて醤油商何某と書いたものに絵が入っておる。

これは明治初年には引札が非常に立派なものが木版所で何度刷りという絢爛たるものがありました。それが大正の初期にはすっかり石版刷りになって、えびすが鯛を釣っておるようなあくどい色彩の引札を一般に配っておった。モラエスさんは徳島に来られてその引札を蒐集してその国貞等の木版の下へ貼りつけてある。これは大正の二、三年に徳島へ来られたときに阿波で蒐集したものと思います。おそらく神戸に持って行った引札でないらしいと思う。松尾という引札屋がありまして、そこから出たものが沢山ありました。

## 6. 終わりに

今回の倉本清一の寄せ書きの発見により、モラエスに趣味を通じた交友関係があったことが確かめられ、徳島では執筆と墓参の他には興味がなく隠棲同然の生活を送っていたという従来のモラエス像に対して一石を投じる新しい一面が見えたと言える。清一がモラエスと知り合うようになったのは清一が 20 代後半の頃で、モラエスは 70 才を超えており、相当な年齢差があるが、清一の次男の大治氏の回想によると清一はモラエスのことを「友人」と考えていた。2 章で述べたように、清一は好奇心旺盛で活動的な人物であり、徳島の多くの成人男性がモラエスを警戒して近づこうとしなかったモラエスに対して、自ら近づき親しくなったのだろう。

残念ながら、清一とモラエスがどのような会話をしていたかは、うかがい知ることができない。清一が創作した劇「浮かれモラエス」は、大治氏によれば百年祭の前にも上演したことがあるということであった。また、百年祭の時のラジオ番組で、清一が出演してモラエスについて語っているはずなので、それらの記録が残っていることを期待したい。

また、モラエスが描いたものを業者が買いにきていたという森房子の回想も注目すべき点であり、今後それを裏付けする資料の探索を行っていきたい。

## 表１ モラエス忌の寄せ書きの参加者とメッセージ

| 名前 | S27（1952） | S28（1953） | S29（1954） | S30（1955） | モラエス及びモらエス忌との関わり |
|---|---|---|---|---|---|
| 浅川 律圓 | | | 署名のみ | | 安住寺住職。 |
| 芦田 逸次 | | 署名のみ | | | S29 県広報長。 |
| 阿部 邦一 | | | | 署名のみ | 徳島県知事。 |
| 阿部 勉良 | 我想古人 | 我想古人 | | | モラエスの長屋が空襲で焼けた跡地の住人。 |
| 天羽 英二 | | | 日本精神<br>日本に惚れて　永しえの眉山は日本晴れ | | 外務省情報部長。外交官。 |
| アルマンド・マルティンス | | | Armand Martins | | 駐日ポルトガル大使。日本文学研究者。 |
| 飯田 義資 | | 羊我山人 | 羊我山人 | 眞知人少有名人多羊我山人 | 郷土史家。ペンネームは「羊我山人」。阿波郷土会。 |
| 生田 宏一 | | | | 敬愛する紅毛碧眼の徳島市民 | 国会議員。徳島県社会福祉協議会理事。 |
| 池上カズエ | | | | 署名のみ | 徳島県社会福祉協議会理事。 |
| 今田 好太 | 判読不能 | | 署名のみ | 署名のみ | 元光慶図書館長。 |
| 岩村 富夫 | | | 署名のみ | | 不明 |
| 岩本　朋三郎 | | | 署名のみ | | 近所に住むモラエスの友人。 |
| 上野 専吉 | マカオ在 | | | | モラエス案内掲載の二十四回忌座談会参加者。元マカオ在住。 |
| 小笠 公韶 | | | | | 国会議員。 |
| 岡本 和夫 | | Com muito saudações | | Com muito saudações de Okamoto | 徳島工業高校教諭。元ブラジル在住。 |
| 蒲池 正夫 | 故国忘れ得ず | 歳去想新 | 日本人の魂をもった異邦人モラエス | モラエス翁顕彰会<br>このひとを見よ | 徳島県憲法記念館長。阿波郷土会会長。 |
| 川口 透 | 昔の徳島には夢があった | 署名のみ | 署名のみ | 署名のみ | 実業家。 |
| 串 春栄 | | | 署名のみ | | 県教育委員。婦人会「あけぼの会」メンバー。 |
| 國澤 慶一 | | | | 署名のみ | 大阪外語大学教授。 |
| 倉本 清一 | 相合傘の絵（安十字、よね、小春）。<br>我れ安住乃地なり　安住寺　清一<br>およね小春のふるさとや恋し　我れ側尓（に）眠らん<br><br>我が思出の | 我れ泣きぬれて　小春の墓にキッスつきず嗚呼　情熱文　豪（S.K 生）<br><br>モラわれてイエス往来小春さん（露郷） | □□□□□<br><br>松本秀重 | 平和の父<br>自然人奈る哉 | モラエスの友人。実業家。寄せ書きのまとめ役。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | モラエス翁（富永研□） | 両手に花野縁あり　お米尓（に）小春　（□□山人）<br><br>S. KURAMOTO | | | |
| 紅露 みつ | | | | 愛に国境なし | 日本初の女性国会議員。 |
| 古角 勝 | | | | Rev. M. Kosumi. | 牧師。時々モラエス宅訪ねていた。 |
| 小西 英夫 | 素朴なる日本を愛し日本人を愛し　眉山のもとに　眠りし君を思ふ | 署名のみ。歌人。残っている短冊と筆跡一致。 | 署名のみ | | 歌人。「徳島短歌」を創刊。 |
| 島村 萬舞 | 私は唯□□の□□の歴□を語るのみ<br>島村生 | 浪にゆらめく　モラエス歩み　お米小春も磯千鳥<br>島村 | | 署名のみ | 教育者。S30 時点で徳島県立城東高校長。 |
| 滝本 | 遺□一つ梅雨の座敷に　モラエス忌　滝本 | | | | 天神社宮司。 |
| 竹田 俊一 | | | 署名のみ | | 徳島県立図書次長。 |
| 竹原　英太郎 | | | 署名のみ | 署名のみ | 県教育委員長。 |
| 立花　まるゑ | | | | 署名のみ | 斉藤コハルの妹。 |
| 佃　實夫 | | | 思想の科学研究会　つくだじつを | | 県立図書館司書。『モラエス案内』編集。『わがモラエス伝』著者。 |
| 長尾　新九郎 | | | 徳島市長長尾新九郎 | 永久にあれ小米小春の物語り<br>徳島市長長尾新九郎 | S26 より徳島市長。徳島県社会福祉協議会理事。 |
| 長尾 義光 | | | 国際平和 | 文化親善永遠平和義光 | 実業家。モラエス翁顕彰会長。 |
| 中山　秀太郎 | 署名のみ | 署名のみ | | 一灯園中山 | 一燈園の徳島光友会の当番（代表）。 |
| 新垣 宏一 | | Niigaki-Kōiti | 署名のみ | | 徳島県教育研究所長。『モラエスの徳島散歩』著者。 |
| 西川 修 | | 署名のみ | | | 不明 |
| 仁科 義之 | | | | モラエスの憶出にひたる百年忌<br>仁科義之 | 県教育長。 |
| 西村 菱雨 | モラエス翁 | | 署名のみ | かぎりなき寂しさたゝえ　微笑める　そのよき眸よ　モラエスとわれ | 観潮院住職。徳島の詩人集団「詩脈」メンバー。S21 年、モラエス忌の法要を任された。 |
| 橋本□□□ | | | | 和魂洋人 | 不明 |
| 花野 富蔵 | リスボアに | 署名のみ | 小春日に | 花野 | 翻訳家。徳島の詩人集団 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 産れ徳島に隠棲し、トクシマを著作にしたモラエスさん | | 眉山で營るモラエス忌 | | 「詩脈」メンバー。 |
| 濱野 英二 | モラエスが小使帳を遺しつる<br>2sen の Toof<br>3sen の Miso | | 日本人茂羅恵寸あれば言擧げもせず世を捨てゝ閑かなるかも | | 元「新小説」編集長。泉鏡花の弟子。「廿四回忌に因む座談会」出席者。 |
| 林　鼓浪 | | 署名のみ | 署名のみ | 新緑の　伊賀町偲ぶモ翁の忌鼓浪 | |
| 林　為亮 | | | | UNESCO　林為亮 | 弁護士。徳島信用金庫理事長。S24, 徳島仮ロータリークラブ会長。UNESCO 協会長。 |
| 原 菊太郎 | | | | 署名のみ | 徳島県知事。 |
| 平瀬 欣三 | 四国放送開局の日 | | 署名のみ | | 一燈園の徳島光友会の副当番（服代表）。 |
| 広瀬　志津雄 | | | 署名のみ | 署名のみ | 新聞記者、徳島県職員、鳴門市議員。徳島の詩人集団「詩脈」メンバー。 |
| 前田 正一 | モラエス翁の□□はこの十圓札一枚壊せばこれで何と何とを買ひその殘で石鹸とマッチ幾個を買ふという方法の會計法であった | 恐れんや雨よ降れ降れ　傘（絵）はある | 悔　前田正一 | | 郷土史家。阿波郷土会。 |
| 松浦 健次 | | | | 署名のみ | S30 は徳島県教育長。S30 発足した徳島県社会福祉協議会理事。 |
| 松本 進 | 栗のいが町侘しいエトランゼ | | 梅雨明けの眉山は緑 | | 四国放送。1972 年に『徳島のモラエス』を編集。 |
| 真鍋 英二 | | | 署名のみ | | 商工会議所総務部長 |
| 萬野　ハツエ | | | | | 当時、徳島県婦人連絡会長。S30 発足した徳島県社会福祉協議会副会長。 |
| 村崎 凡人 | 慈眼の詩人 | | | | 歌人。当時「村崎学園」(現在の徳島文理大学）理事長。 |
| 森 房子 | コンニチハと言ってるやふなモラエス翁 | 署名のみ | 署名のみ | 再会した想ひ　森房子 | モラエスの家に通っていた少女。 |
| 湯川 丹平 | 眉麓　陶□□ | | | | 不明。 |
| 湯本らく | | | 署名のみ | | 湯本二郎夫人。二郎はモラエスの死後徳島に学務部長として赴任し、七回忌を盛大に開催することに尽力した。記念碑の除幕式に夫婦で参加し、二郎氏が字が書けないので代わりに夫人が署名。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 横山 昭(春陽) | 生きたモラエスさんに會いたかった | | | あの人を想ひ　この人を想ふ | 徳島新聞記者。郷土史家。阿波郷土会。 |
| 米田 久雄 | | | | 判読不能 | S32 に県議会副議長。 |
| 若槻 克己 | | | 署名のみ | 署名のみ | 医師。阿波郷土会。百年祭においてで各所に協賛の依頼文を考案。 |
| 鷲野 宥恵 | □□不滅 | | | 地蔵院住職鷲野宥恵 | 地蔵院東海寺住職。慈雲庵の本山で、モラエスの仏壇を祀っている。モラエスとは小坊の時から交流。 |
| 渡部 廣之 | | 署名のみ | | | 歌人。 |
| W.A. Finnin | | 署名のみ | 署名のみ | 署名のみ | GHQ の軍人として徳島に来て、退役後に徳島市住み英語講師を務めた。モラエスとは直接の交流はないが、モラエスを海外に紹介した。 |

判読できなかった文字は「□」で示している。またモラエスやモラエス忌との関係が分からない者は「不明」としている。